

---

# Marriage of Convenience ~何も知らない人~

すももっち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Marriage of Convenience ～何も知

### 【著者名】

すももっち

### 【ISBN】

N3254H

### 【あらすじ】

政略結婚で旦那になつた男は、見栄えも頭も性格も申し分ない男だった。と思っていたが、それはただの猫かぶりだった。2人の結婚生活の攻防戦のお話。

親友の結婚後程なくして、私にも結婚の話が舞い込んだ。相手は父が勝手に選んできた人材で、父曰く、

「格好良くて、誠実で、頭が良い青年」

らしい。そんな人間がこの世にいるものか。そんなんじゃまるで神様か何かか？

その人は身分があまりよろしくないらしく、しかし実力は十分にあるらしい。父は自分の跡継ぎを彼に託したいと考えているようだつた。つまり、私と結婚させ、婿養子にとる、という訳だ。

私に異存はなかつた。父が跡を継がせたいと思う人と結婚しようと、昔から決めていたことだったから。それに、話を聞く限りでは良い人そうだ。

私は父と母も交えて、その人を家へと招いた。

「ミラ、こちらがギースだ。ギース、私の娘のミラだ」

ギースの金色の短い髪がさらりと流れた。

父の格好良いというのはどうやら本当らしい。身長も180はあるそうな高身長、顔も整つていて、言葉遣いもとても丁寧だ。目の前に食事が並べられた。

「さあギース、遠慮などせんぐれよ」

「はい。では、お言葉に甘えて」

笑顔も軽く合格点だ。

父は身分があまり良くないと言つていたが、王家にだつて仲間入りできそうな程、ギースのテーブルマナーは完璧だった。

父が気に入るのも頷ける。

しばらく世間話をし、父が突然話を変えた。

「さて、单刀直入に言おつか。ギース、家の娘はどう…」

「いやですわ、お父様。本当に直入すぎです」

最後まで待つことができず、手を口元にあてて笑つて言つた。どん

な奴だつてこんな所じや本当の感想なんて言えたもんじやない。そんなことも分からぬの?うちの父親は。

「いや…、しかし…」

「お父様」

笑つているのは口元だけで父に言つ。その私を見た父は一瞬顔を引きつらせ、それ以上は何も言わずに食事を続けた。

「…」

その時ギース殿が何か呟いた。

「えつ?」

「いえ、なんでも」

ギース殿はスマイルで返事をし、食事をまた始めた。後で「優秀な秘書官も娘には弱いのだな」と言つていたのだと、地獄耳の母から聞いた。

その一回の対面だけで、私たちの結婚が決まった。ほほ父の独断である。こちらにもあちらにも異存はなかつた。

ギースが仕事に追われていたため、式は行わずに、取り敢えず入籍だけを済ませた。

父と母は2人の邪魔はしないとか何とか言つて、近くの別荘に私たちを住ませた。

そういうして、私たちの夫婦生活一田日を迎えた。といつてもギースは仕事で昼はおらず、夜に帰つて来て、もぞもぞと同じベッドに入りこみ、初夜は指一本も触れることなく終わつた。話を交わす暇さえなかつた。

父の策略であるにしても夫婦なのだから、1日に一回ぐらいは言葉を交わすべきであらう。

「夫婦生活一日目、私はギースが起きると同時に田を開けた。

「…おはよづびぞいます」

ベッドから身を起こし、部屋を出ようとしているギースに言つた。ギースは驚いた顔で振り向いた。

「 . . . ああ 」

ぎこちない朝の挨拶。というよりか、ギースはただの返事だった。  
何か、雰囲気というか纏うオーラが先日と変わつていて感じたのは、  
気のせいであろうか？

私はベッドから出ようと布団を持ち上げた。

「 気を使わなくていい 」

「 えつ？ 」

「 政略結婚のようなものだ。お前も家にしばられるような生活はイヤだろ？ 好きに生きればいい 」

私は首を傾けた。何を言いたいのかまったく分からぬ。

「 意味が…、分からぬわ… 」

ギースは溜め息を落とした。

「俺のことは気にしなくていいと言つたんだ。外に男を作ろうが、遊び歩こうが、俺は一向にかまわない」

「 なつ…！ ！」

その後の言葉が続かなかつた。口を動かすことはおろか、指一本動かない。しかし、全身が熱くなつていくのは鮮明に分かつた。

「 ただ、あまり大っぴらにはするなよ。世間体に悪いからな 」

ギースは捨て台詞のように言い、部屋を出ていった。後に馬車が遠ざかる音が小さく聞こえた。

「 な、なんだとー！？！？」

私の怒声が邸中に響き渡り、数人の侍女が部屋に飛び込んできた。

「 信つじらんないっ！…ありえないっ、サイテー！… 」

「 み、ミリカ… 」

親友の家、つまり城まで来て、今日あつたことをすべて話した。アリシナは慰めるような哀れむような目を寄越した。

アリシナは第一皇子と、つい先日、盛大な結婚パーティーをした。巧いことやつたのだ、こんなおつとりとしているが。まあ、それは

また別の話。

「形だけだからってあんな言い方しなくていいじゃない！？」

「なんのよ、あれー！」

叫ぶだけ叫び、出された紅茶を一気に飲み干した。後味は苦い。

「あいつ、家の地位を狙つてたのね。あまり身分はよろしくなかつたって、お父様に聞いたもの。そうだ、アリシナ、頼みがあるんだけど」

「えつ、何？」

アリシナは飲もうとした紅茶を持ったまま、きょとんとした顔をこちらに向けた。

「ギースが元々どこの出身だか調べて欲しいの」

「ええ！？ い、いやよつ。ギース殿に直接聞いたらいじやない…」

アリシナは結局口をつけなかつた紅茶を焦つたようにテーブルに戻した。中身が少しカップから零れた。

「話聞いてた？ あいつになんか死んだって聞きたくないわ。ほら、

パーシェント皇子にでも聞いてみてよ。ね？ お願ひ」

パーシェント皇子とは、言わずもがな、アリシナの旦那で、次期国王である。

顔の前で両手を合わせ、アリシナを押しのけに言った。アリシナは私から視線を泳がせるように反らした。あともう一息だ。

「お願ひよ、アリシナ。親友のお願いつ」

「もう…、あんまり期待しないでね…？」

「きやー、ありがとアリシナ！ もう大好きっー！」

「ひやっ」

私はアリシナの首に手を回し、力強く抱き締めた。やはり持つべきものは友達だ。

「そ、それで、ミラはこれからどうするの？」

アリシナは私を引き離しながら言った。

「う、浮氣とか…、するの…？」

「しないわよ。今はね」

「い、今はって、いつかするのー?」

「まずはあいつの気をこちらに向けてやるのよ。あとはそれからね」とことん仕返ししてやるわ。みてなさいよ。ミラ様の恐ろしさを教えてやるんだから。

「お帰りなさい、あなた」

「……」

さすがにギースの帰宅時間は遅い。しかし、仕返しするためには夜も待つて、朝も起きることから始める。  
ギースは若干驚いた表情をしただけで、返事はしなかった。ギースは同じベッドに入ってきて、こちらに背を向けるようにして寝転がった。

「…おやすみなさい」

私が言った瞬間、ガバアと音がしそうなぐらいな勢いでギースは身を起こした。顔をこちらに向けて、私を威圧的に睨んだ。

「朝も言つたはずだ。俺に…」

「気を使つな、でしよう?」

「そうだ」

私は皮肉たっぷりな笑顔をギースに向けた。

「それはあなたじやなくて、私が決めることではなくて?」

明らかにギースの顔が歪んだ。この猫かぶりめ。

「俺としてはアンタのことを思つて言つてやつたんだがな」

「余計なお世話よ」

私たちの間に火花が散つた。どちらも決して目は反らさない。

「それならば勝手にするがいい。俺はどうでも構わないんだからな」

「ええ、そうするわ。お言葉に甘えて」

私たちは同時に布団に潜り込み、お互いがお互いに背を向けあった。

こんな性格のねじ曲がった奴に負けてなるもんかっ。

次の日から私はギースと共に起床し、そして就寝した。

ギースはともかく、私は挨拶を欠かさなかつた。しかし大概は挨拶だけでは終わらず、何かとちょっととした言い合いをしていた。

「ちょっと待て…。なんだこれは…？」

ギースはその手にマフラーを取つた。その目は何か獸でも見るような目付きで、汚れ物でも触るような手付きである。

「マフラーに決まってるじゃない。私が編んだんだから触んないでちょうどいい」

私は荒々しくひつたくり、自分のタンスへとそれを押し込んだ。昼は大概が暇なため、好きでもない編み物をやつていたのだ。

「…とてもマフラーには見えな…」

ボスツ

ギースの顔を目がけて枕を投げた。それはギースの顔にミラクルヒットし、投げたこちらが逆に慌ててしまつた。

ギースの体が小刻みに震えているのが分かる。

「あ、っと…、そう。私のマフラーを貶すからよつ

「あんなのがマフラーと呼べるかー！」

ギースは私が投げた枕を拾い上げ、こちらめがけて投げてきた。

私はそれをなんとか交わし、反撃をするため、ベッドにある枕を手繰り寄せた。

「…ちょっと…、ちょっと待てつ…！」

「待つかつ！」

私はとにかく無我夢中で枕を投げ続けた。と、枕がそう何十個もある訳がない。ベッドの上にはもうすでに枕はなかつた。

「…やっぱ」

「ふつ、覚悟しろよ」

ギースが黒いオーラを放ちながらそう言つた。こいつが本気で枕を

投げてきたら、本気でやばい。

でもなんだろう？なんか楽しいかもしない。

「く~りえーっ！…」

「あやー…！」

こんな叫び声を上げているにも関わらずに誰も来ないと云うのは、邸の主として如何なものか。

私は案外、運動神経がいいのかもしれない。

「ぜ、全部…避け切つたつ！！やつた…ぶつ」

嵐が去った後の最後の枕が顔にミラクルヒットしつた。自分ではないがまるでデジャブ。なんて無様な。やはり投げた本人が慌てていた。

「いや、…すまん」

普段はあんなに偉そうにしているくせに、今はそんなのは微塵も感じられなかつた。私はそれがあまりにも可笑しくて、笑いが込み上げてきた。

「くつ…くくく…」

「は…？」

「あーっはっはっは！！」

しまいには大声でお腹を抱えて笑つていた。ギースはきょとんと立ち尽くし、それは私を更に煽つた。

私がまだヒーヒー言いながら涙を拭う頃、ギースは溜め息をして、枕を拾い始めた。

「つたく…、何をやつてるんだ俺は」

ギースは拾いながらそう呟いた。笑いはまだ收まりきつていなが、私も一緒になつて枕を拾つた。

「人のマフラーを貶すからよ」

「だからあんなのはマフラーとは言わん」

私は枕を拾う手を止め、ギースを睨み付けた。

「…またやりましょうか」

私が枕を強く握り締めると、ギースはげんなりとした表情で私を見

た。

「なら、それをつけて外を歩けるか？」  
うつ…。

私はふいと視線を外して、枕を拾う手を動かした。  
「あ、歩けるわよ…」

「ほう。だつたら今から歩いてきたらどうだ？」「ギースは皮肉るように、意地の悪そうな笑顔で私を見やつた。いつの間にか立場が逆転している。

「そ、それは…。そ、うよ、まだ完成していないのよ！」

そこまで聞くと、ギースは深い溜め息を落とした。

「まつたく…、本当に諦めの悪い奴だな。負けず嫌いといふか…」

「余計なお世話よ」

そんな軽口を叩きながら、取り敢えず枕を全て拾い上げ、綺麗にベッドへと戻した。

ふと時計を見上げると、かなり夜遅くなつていた。すでに日付が変わっている。

「やだ、もうこんな時間。あなた明日も仕事じゃなくつて？」

「誰のせいでこんな時間になつたと思ってるんだ」

…私のせいな訳？と、実際は私が勃発させたのだ。急に本当に悪いことをしてしまつたといつ気がしてきて、ベッドに潜り込んだギースを見つめた。

私は毎日暇な生活だが、ギースは毎日仕事漬けなのだ。もしかすると、相当疲れているかもしれない。

「…悪かったわよ」

ギースはベッドの中で身をよじり、立つたままの私を見上げた。その顔は目をぱちくりとしばたかせている。

「明日は雨か」

むかっ。

私は口を尖らせてギースを睨んだ。ギースはその私を軽く笑い、布団から片手を出し、私の腕を引っ張った。

「いたつ

「少しでも悪いと思うんだつたら、さつせと寝る

何よ、偉そうに…。

思つたけれど、言つのはやめた。ギースは手を引っ込め、私に背を向けた。

私も布団にちやんと潜り込んで、ギースに背を向けた。

「…おやすみ

「…ああ」

珍しいな、返事があるなんて。

次の日の朝は、やはり起きることはできなかつた。ギースが起きたのがなんとなく分かつたが、眠くてダルくて、目を開けることすらできなかつた。

さあ、言わなきや。いつもの…。

「…いってらっしゃい…」

寝呆けていたから、しつかり言えていたかは分からない。

私の記憶が正しければ、

「行つてきます」

とこう返事があつたと思つ。ただ本当に寝呆けていたので、確実性には欠けるけれど。

「もともとは貴族の方じやなかつたみたい。商人の子供だつたらしいんだけど、頭が良くて、どこかの貴族に一度引き取られたんだけど、その貴族の人人がすぐに亡くなつちゃつたらしの。それでも戸籍上はちゃんと子供でしょう?だから親戚でたらい回しにされて…、それに耐えきれなくなつて1人になつて、城で働くようになつたんですつて。その…、結構大変だったみたい」

律儀なアリシナ。真面目なアリシナ。ちゃんとパーシェント皇子か

ら聞きましたらしい。

私は反応に困ったけれど、礼はちゃんと述べた。

「//アと結婚するまでは、親戚の関与とかも多かったらしいよ」  
だから早く結婚したかったのだろうか。そうだとしたら、家の地位  
はさほど関係なかったのかもしれない。

「あと…」

「あと、何?」

アリシナはもじもじとした風で、私から田線をそらした。

「パーシュンドが…、気にする」となって…」

「何が?」

話の芯が見えなくて、私はイライラした。アリシナに対してなのか、  
パーシュント皇子に対してなのか、それとも…。

「ギース殿の過去のこと。心配なって」

「別に、心配なんかしてないわよ。本人だって変に心配して欲しく  
ないんじゃない?」

「……」

「あれは同情して欲しくないってタイプよ。私だって同情するよう  
なタイプじゃないし。今回のこととはしたって何も変わる訳じゃない  
しね。だからパーシュント皇子に言つといて。心配なんかしないつ  
て」

目の前の紅茶に手を伸ばし、一口だナ口をつけた。前よりも少し甘  
く感じた。

「…//ア、変わったね」

「えつ?」

アリシナはふんわりと微笑んだ。

「なんだかんだ言って、ちゃんとギース殿の奥さんやつてるよ」  
ギース殿の…奥さん?

「前はケンカ腰で負けないって感じだったけど、今はそんなことな  
い。今は…ギース殿の良き理解者つてかんじかな」

「理解者つて…」

そりや一緒に住んでいるだけあって、性格的なものは大体把握しつもりでいる。

「何も知らないわよ。ほんとに…何にもね…」

テラスから見える街は、すごく遠かつた。家から見た方がずっと近く見える。

なんでだか、胸は淋しさで一杯だった。

その夜、ギースはいつもと同じ時間に帰ってきた。私は寝室で1人、ワインを開けていた。アルコールの力を借りれば、なんとかなるだろう。

ギースが部屋に入ってきた。

「…お帰りなさい」

「…ああ」

ギースはすぐにベッドに寄つて行つたが、布団に入らずに私を見た。  
「珍しいな、ワインなんか飲んで」

それはそうだ。元々ワイン、というよりもアルコール類には弱いのだ。気持ちが悪くなる。

私はグラスをテーブルに置いた。顔を見ることができなくて、ワイングラスを見つめた。そこにはギースの顔がゆらゆらと映っていた。

「あなたのこと、聞いたの。今日」

もつと他に言い方があつただろうが、それしか言えなかつた。

しばらく沈黙が続いた。

「そうか」

短い返事だつた。

私は勢いよくギースの顔を見た。驚いた私の表情に、ギースはきよとんとした。

「怒ら…ないの？」

「誰が？誰に？」

ギースは首を傾げ、少し近付いて來た。

「あなたが、私に…。勝手にあなたの過去の話を聞いたのよ?」「アルコールが入っているせいいか、目頭が熱くなつた。

やつぱり飲むんじやなかつた。

ギースは私の横に腰を下ろし、軽く微笑んだ。

「明日は雪か」

「わつ、私は真剣に言つてるのつ」

口から涙声が飛び出し、ギースから目をそらした。そらす前に見たギースの顔が優しく微笑んでいて、いよいよ一粒目が零れた。

「同情なんかしないわよ。頑張んないと、逆戻りになるわよ」「こんな言い方しかできない自分が歯痒い。悔しい。恥ずかしい。

次から次へと涙が溢れてきた。なぜ涙が出るのか分からぬ。

「ああ、頑張るよ」

なんで今日に限つてそんなに素直なの?いつもなら言い返してくるくせに。

ギースは私の頭を撫でて、そのまま自分の胸元へと引き寄せた。悪いけど、服で涙を拭かせて貰うわよ。

その日を境に何か変わったかといふと、特に何もない。

ギースは相変わらず私の編み物にケチをつけて言い合ひをしたし、ベッドでは背を向けあって寝てる。

ただ最近少し気になることがある。

別に欲求不満とかそういう訳ではなく、ギースは同じベッドで寝ているにも関わらず、私に指一本触れない。キスすらしたことがない。政略結婚とはいえ、同じ屋根の下で生活しているのにだ。

「私、女としての魅力がないのかしら…」

アリシナは紅茶を片手にむせこんだ。私はその背中をさすりながら軽く睨んだ。

「随分、正直な反応するのね」

「ちつ、違うよつ…!あまりに突然で…。なんていきなり、そんな

「…」

説明するにもしごくくて、私は視線を泳がせた。

「あ、ギース殿の…」

アリシナが楽しそうに笑う。

この子はいつからこんなイジワルになつたやつたのかしり。

「じゃあなんで今まで何にもないのよ…」

アリシナは小さく首を傾げた。

「何にもつて…、えつ！？」

言いたいことを察したらしく、アリシナは頬を真っ赤に染めた。アリシナが赤くなつてどうするのよ。

「もうパーショント皇子とはやつちやつたんじょ？」

「やだつ、やめてよ！」

アリシナはこれでもかと思つ程、顔を真っ赤にした。否定しないと、いうことは肯定だらう。

しかしそれは当たり前だらう。結婚しているのだもの。

「私だつて別にそういう事したい訳じゃないわよ。でももう夫婦生活初めて1ヶ月になるのよ？…」いろいろ考えちゃうじゃない？

アリシナは若干赤みを残す顔を片手で押さえながら、一いちを見た。

「いろいろ、つて？」

「…女がいる」

「ええ！？」

いろいろ考へてみた。けど最後にはどれもそこに行き着く。

ギースは最初に『男を作つてもいい』と私に言つた。それは同時にあちらにも言えたことではないだらうか。もつと言えば、結婚前から意中の女がいた。でも絶対に揺るがない地位を得るために別の女と結婚した。でも心は向こいつに…。

「か、考へすぎよ、ミリカ。いくらなんでも…」

「どうして？だつたら他に理由もあるつて言つの？…」

自然と口調がキツいものになつてしまつた。アリシナは悲しそうに

瞳をおとした。

「そ、それは…」

「ごめん、アリシナ。今日はもう帰るわ」

私は立ち上がり、テラスから見える街の風景に背を向けた。紅茶には一切手を付けなかつた。

「ミツツ！」

アリシナは荒々しく立ち上がつたが、私はまた来るわと言葉を残し、一度も振り返ることなくその場を後にしてしまつた。

あんな遠い街の景色は、もう見たくなかった。

いつもよりも遅いギースの帰宅が、私の予想を裏付ける気がした。

「お帰りなさい。…遅かつたのね」

「ああ。今日は忙しかつたんだ」

その言葉を素直に受け止めることができない。

誰かと会つてきたの？

ギースはいつも如く同じベッドに身を滑り込ませた。

ベッドの中で上半身を起こしたまま、私はその一連の動きを見つめていた。その視線に気付いたのだらう、ギースは体の向きを変え、私を見上げてきた。

「…どうした？」

その優しげな声も顔も、違う誰かの為にあるような気がしてきて、そのギースを見るのが億劫になり、視線を外した。それを訝しんだのか、ギースは同じように体を起こした。

「…何があつたのか？」

「意中のお方がいらっしゃるんじょ？」

「は？」

ギースは変な声を発した。

「何を馬鹿な…。何をどうやつて考えたらうそつなるんだ？」

ギースは鼻で笑うよくな言い方をした。それは私を逆撫でし、私の声は荒くなつた。

「ならなぜ何もないの？私たちの間には何もないわ。結婚してもう1ヶ月よ？普通おかしいとか思わない？」

「何もって…」

「それによーあなたは私の名を一度も呼んだことはないわっ！」ギースは黙った。それは反論がない現れで、私は妙に悲しくなつた。「別に、あなたに女がいても私は構わないわよ。元々そういう結婚だつたんだものね」

やはり私はこの人のことを何も知らない。

私は布団に潜り込んだ。もちろんギースに背を向けている。初めておやすみを言わない就寝をした。

次の日の朝も行つてらつしゃいを言わなかつた。気にするなという方が無理なのだ。

なぜだか、もうギースの顔を見る事もできない気がして怖くなつた。なぜ怖いのか、考えなくなつた。

午前中は布団から出ることが出来ず、中でずつとうずくまつっていた。どのくらいそうしていただろうか、外から馬車の音がした。客人ならば今日は速やかに帰つて頂きたいものだが。とても人に会えるような顔はしていない。

しかし階段を昇る音がして、それはあり得ないぐらいの速さで階下から近付いてくるのが分かる。そして部屋の扉がすごい音を立てて開いた。

それにはさすがに驚いて、私は布団から顔だけを覗かせた。

扉を開けたのはそこに立つていたギースだつた。ギースは荒い息を繰り返している。

「いつまで寝ているつもりだ。起きろ。出かけるぞ」

「え…？」

ギースは私のことはお構い無しに侍女を呼んだ。侍女たちは私をベッドからはがし、髪を整え、薄く化粧を施した。

ギースはその支度が終わると同時に、もう待てないと言わんばかりにギースは私の腕を強く引き、階段をかけ下り、私を馬に乗せ、自分もその後ろに乗つた。

「いつたい、どういづ…」

「つかまつていろ」

私の言うことにギースはまったく耳を貸すことなく馬を走らせた。馬は猛スピードで走り、私は口を開くことができなかつた。

程なくして馬はスピードを緩め始めた。馬が完全に止まつたのは、私のまつたく知らない場所だつた。邸、のようだが、いつたい誰の邸なのだろうか？

ギースはまず自分が馬から下り、その後に私を下ろしてくれた。

「この家は俺を一番最初に引き取つてくれた、いわば義父の家だ」「え…」

唐突に告げられ、私は反応に困つた。

邸は決して大きくなはないが、どこか気品にあふれていて、誰かがダメに手入れをしているのが容易に分かつた。

ギースは私を中へと招き入れた。

「俺の本当の父親は商人だというのは知つていいだろ？　その父が病氣で死んでな。義父はそれで俺を引き取つて下さつたんだ。頭の良し悪しに関係なく…な」

廊下を歩きながらギースは語つた。一つ一つの部屋の思い出を噛み締めているようだつた。

私はギースの後ろを黙つて歩いた。

「義父は俺に勉強はもちろん、いろんな事を教えてくれた。それがあつたからこそ、今の俺があるんだ。その時に義父に教えてもらつたことの1つにこんな事があつた」  
ギースが立ち止まり、私を振り返つた。

「本当に大切な人を作るときは覚悟を決めろ

ギースの右手が私の左頬に触れた。それは大切そうに、割れ物でも扱うような触れ方だつた。

「不安にさせてすまなかつた。覚悟を…仕切れていなかつたんだ」

ギースは自嘲するように笑つた。  
「4年、俺はここで生活をして、義父は病氣で死んだんだ。その後は義父の親戚の家を転々とした。どこも楽しくはなかつたな。いい思い出は見つからない」

すでに顔をそらされていて、その表情を伺うことはできない。しかし、きっと寂しい顔をしているのだろう。

私は先ほど左の頬に触れたギースの右手を両手で包んだ。ギースは一瞬強ばり、すぐに元に戻つた。

「名前を呼ばなかつたこと、悪かつた。どうしても踏み出せなかつた。…怖かつたんだ」

「怖かつた？」

「お前が…いや、ミラが大切になつていくのが、すごく怖かつた。今まで大切に思う人はすぐにいなくなつていていたからな。失う怖さが、どうしても一線を越えることができなかつた」

本当に辛かつたのだろう。その気持ちを私の物差しで測ることはできない。でもね。

「本当にね。私はそれにどれだけ想像を膨らめたことか」

ギースは軽く笑つた。

「女まで出てきたからな」

しかしその笑いはすぐに止まつた。ギースは私の前に回り込み、私の左手を強く握つた。

「俺に女はない。いるとしたらミラ一人だ」

嬉しかつた。何にも変えようのない嬉しさだつた。だから私は返事の変わりにギースに抱き付いた。その私の背をギースの大きな手が包みこんだ。

「今つて、ここに誰も住んでないわよね？」

しばらく無言のまま抱き合つて、私は思い付いたことをそのままの

状態で口にした。

「ああ、そうだが。それが？」

私はギースの体から少し離れ、ギースの顔を見上げた。

「なら、ここに引っ越しましょ~」

「は…？」

ギースは田を見開いて私を見つめた。その素直な反応に、思わず頬が緩んだ。

「だつてここの綺麗だしお洒落じゃない？気に入つたわ。それに…」

「それに？」

私は恥ずかしくなつて、またギースの堅い胸板に顔を押し付けた。

「それに、ここの方があなたが素直みたい」

しばらくギースは黙り込み、というよりも固まつてしまつたみたいだつた。それがあまりにも長かつたので、私は顔を離してギースを見上げた。

ギースは田をぱちくりさせて私を見下ろしていた。

「…あなた？」

「…もう解禁だよな？」

「えつ、何？」

ギースは私の腕を奥へ奥へへと引いていった。心なしか少々速めだ。

「この奥に寝室がある」

「寝室…、つてええ…？」

ま、待つてよつ。何？今からそういうことなの？

私は抵抗する間もなく、目的の部屋へと到着した。

「まつ、まだ夕方よ？」

ギースはカーテンを閉める手を一度止め、私を振り返つた。その顔はいたずらっ子のような、あの皮肉たっぷりな笑顔である。

「不安なんだろう？」

「いや…それはもう理由が分かつたし…。し、仕事は？」

いつのまにやらカーテンを全部締め切り、それなりに暗い空間が出

来上がつていた。

そういうえば朝は仕事で城に向かつたはずだ。こんなに早くに仕事が終わる訳がない。

「休んだ。今日と明日」

「休んだっ！？よくそんな急に休みが取れたわね…」

「皇子には理由が分かつたみたいだつたからな

え？皇子…？」

「ちょっと待つて…。皇子つて、パーシェント皇子のこと？」

ギースは私の手を取り、ベッドへと誘導した。しかし、その私の言葉に一度歩を止めた。

「やつぱりな…。ミラ、俺の仕事忘れてるだろ？」「  
忘れてなんかいない。なんたつて父と同じ秘書官…

「秘書官っ！？」

「ああ」

「も、もしかして、パーシェント皇子の…秘書官…？」

「正解」

「これは予想外だつた。まさかギースが皇子の秘書官をしていただなんて…。これで仕事が忙しいのに合点がいつた。

ギースはベッドへと足を動かし、そこに私を座らせた。

「だからミラが俺の過去を探らせたのも知つていた。  
皇子は『丁寧に『ギースの奥さんがギースの過去を知りたがつて  
から、教えてもいい？』とわざわざ聞いてきたからな  
何やつてるのよ、あの夫婦は…。  
つて、それつて…」

「あなた、それで許可したの…？」

「だからミラはアリシナ様から聞いたんだろう？」

つまり、私は1人で罪悪感に駆られていただけつて訳？あの涙はなんだつたんだ。

「あなたとアリシナはグルだつたのね」「  
ギースは小さく音をたてて笑つた。

「グルじゃない。ただ、お前とアリシナ様の話は結構簡抜けていた」というだけだ。パーシェント皇子経由でな」

「つまりその3人でグルだつたんでしょう」

不愉快極まりない。ギースは面白そうに笑っているが、私はそうもいかない。

もう絶対やらせてやんないからっ！！私はそっぽ向いて、唇を尖らせた。

「悪かった。でもその2人の協力がなければ、俺は今ここにはいな

いだろう？？」

「まあ、そうだけど……」

「それと……」

ギースが私を優しくベッドに横たわらせた。その上に覆いかぶさるようにしてギースもベッドに乗った。

「話を聞いた後にミラが言つたこと、それを聞いて思つたんだ。ミラが妻で良かつた」

その後のことは2人の秘密ということ。少し言つてしまふならば、ギースが私に向けて愛の言葉をたくさんくれた。もちろん私も。

(後書き)

最後まで読んで頂きたい、誠にありがとうございました。駄文とは重々承知していますが、何かご意見ご感想ございましたら、お気軽にお願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3254h/>

Marriage of Convenience ~何も知らない人~

2010年10月9日23時16分発行